■研究ノート

市民による文化活動成立の文化的要因

—飯田市の人形劇フェスタを事例に—

松　崎　行　代*

この研究ノートは、市民の文化活動による地域コミュニティの形成と機能の活性化について検討していくにあたり、「いいだ人形劇フェスタ（以下、フェスタと略記）」を事例として取り上げ、この市民文化活動が32年間続く飯田市の文化的土壌を把握し、市民による文化活動成立の文化的要因を検証することを目的としている。

飯田市を中心とした伊那谷南部には、かつて他所から伝播されたさまざまな芸能が住民によって享受、伝承された。この地には現在も、数百年の歴史を持つ民俗芸能が数多く、人形芝居（人形浄瑠璃）４座、うち２座は飯田市内に、また、この地にしかない屋台獅子が30余、うち約20が飯田市内に継承されている。また、歌舞伎（地芝居）は大鹿村の大鹿歌舞伎、下条村の下条歌舞伎が現在継承されている。飯田市内には現在継承されてはいないが、学校の校舎を舞台と兼用できるようにした座光寺地区の旧座光寺小学校の“舞台校舎”をはじめ、舞台の遺構は伊那谷全体に150余確認されており、かつての隆盛の様子がうかがえる。こうした住民の芸能活動への盛んな取組みにみられる文化的土壌は、フェスタのような市民文化活動成立の大きな要因になっていると考えられる。

本稿では、人形芝居、歌舞伎（地芝居）、獅子舞の３つの伝統芸能を取上げ、それらの誕生と衰退、また、そこにかかわった人々の様子から、飯田市の市民文化活動であるフェスタ成立の文化的要因を検証した。

＊　京都女子大学大学院　現代社会研究科
公共圏創成専攻　博士後期課程

キーワード：市民文化活動、伝統芸能、人形芝居（人形浄瑠璃）、歌舞伎（地芝居）、獅子舞、いいだ人形劇フェスタ

はじめに

地域コミュニティの活力衰退が社会問題の１つとなり、「地域活性化」「まちづくり・むらおこし」等を政策の柱に置く市町村が多い。

地域コミュニティの活力衰退は、冠婚葬祭や福祉・教育といった相互扶助、祭りなどの伝統文化等の維持、地域全体の課題に対する意見調整の機能低下を引き起こすと考えられる。そして、今、行政や住民自らが何らかの手を打たなければ衰退方向への加速が強まることは想像に易い。

長野県飯田市は、県南部地方の中心都市である。同市では、1979年に始まった人形劇の祭典「人形劇カーニバル飯田（カーニバルと略記）」を前身とする「いいだ人形劇フェスタ（フェスタと略記）」を毎年８月に開催している。2010年で32回を数えたフェスタは、その歴史ばかりでなく、参加劇団・会場・公演数などで国内最大の規模を誇る。毎年３～５の海外劇団を招聘し、10周年毎に国際フェスティバルを併催するなど、日本を代表し世界に通じる人形劇の祭典となっている。

飯田市民にも、フェスタは横断的・縦断的な広がりを持って浸透している。フェスタに合わせて親戚らが帰省し皆で人形劇を観に行ったり、30年の歴史のなか、子どものころ親に連れられて人形劇を観た人たちが親となり、自分の子どもを連れて人形劇を観に行く姿も見られる。フェスタはまさに、飯田の年中行事の１つとして位置づいている。

筆者は今後、地域コミュニティの形成と機能の活性化において文化活動の果たす役割を、飯田市のフェスタを事例に検討していきたいと考えている。飯田市には300年の歴史を持って継承される人形芝居（人形浄瑠璃）が２座残っている。カーニバル誕生時の市長である松澤太郎（松澤，1992：338)、また佐藤一子（佐藤，1989：163）は、このような伝統芸能を有する文化的風土が基盤としてあることが、カーニバルのような祭典が飯田市で開催されるようになった理由の１つであるとしている。そして、カーニバルとフェスタという人形劇の祭典が32年間継続され“伝統”の域に入ったとみなしてよいまでに至った要因も、この点に関係があると考えられる。

そこで本稿では、より広い視点でこの地の芸能の変遷をたどり、フェスタという市民による文化活動が展開され根付いたこの地域の文化的要因を検証し、地域コミュニティ活性化のために市民の文化活動が果たす役割を検討する一研究資料としたい。

１．飯田市の概要―「伝統芸能の宝庫」と「人形劇のまち」―

(1) 伝統芸能の宝庫 飯田

飯田は古くから東西を結ぶ交通の要所であった。天竜川の東岸、江戸に通じる茅野から大鹿を通り遠州水窪の山住神社に至る秋葉

信仰の道、秋葉街道。天竜川の西岸、塩尻から飯田を経て根羽を通り、岡崎、名古屋に至る伊那街道。木曽の中山道と伊那街道を結ぶ大平街道と清内路道。飯田から新野を経て上津具、名古屋に至る遠州街道。こうした街道により、物資の運搬とあわせ文化の伝播が盛んに行われた。飯田で生産された煙草・和紙・繭・椀・干し柿などが名古屋方面に運ばれ、代わりに関西の人形芝居や三河の花火、また、江戸の歌舞伎が飯田に入ってきた（日下部，1985：120－121）。東西の都に芸能が花開いた江戸後期、飯田は山間の地にありながら、養蚕を中心に経済的にかなり豊かであったことがうかがえる（桜井，1985：39－43，大沢，1985：44－48）。

飯田を含む伊那谷南部の下伊那地域は、民俗学の宝庫とされている。かつて上記の街道によりこの地に伝えられた神事や芸能は、住民が精力的にその享受に励み、観て楽しむ芸能から住民自身が演じて楽しむ芸能となり、そのなかのいくつかは現在に至ってなお継承されている。遠山郷の霜月祭り、阿南町新野の雪祭りや天龍村坂部の冬祭り。飯田市の黒田人形・今田人形、阿南町の早稲田人形。大鹿村、下条村の歌舞伎。そして、飯田市中心に30にもおよぶ屋台獅子の獅子舞。年間を通した祭りの数とそれにあわせて行われる神楽や田楽の神事、芸能の奉納の数は枚挙に遑がない。

(2) 人形劇のまち飯田―人形劇の祭典カーニバルとフェスタ―

①カーニバルからフェスタへの変遷―理念および運営体制と市民の参加形態の変容―

飯田市で毎年８月に開催される「いいだ人形劇フェスタ」は、前身を「人形劇カーニバル飯田」とし、1979年に誕生した。回数を重ねるに従い徐々に規模を拡大し中身の充実が図られたカーニバルは、飯田市と人形劇関係者の間（飯田市においては、通称「人形劇人」と呼ぶ。以下、劇人）の問題により、1998年の第20回をもって終了する。しかし、カーニバルが飯田市民にとって大きな意味を持っていたと評価する市民の働き掛けにより、翌年1999年にはフェスタとして再生する。昨年2010年にはフェスタは12回を数え、飯田市の人形劇の祭典は、カーニバル20年を含め通算32年の歴史を重ねた。「人形劇のまち飯田」は、カーニバルとフェスタ、この２つの人形劇の祭典を核につくり上げられてきたといえる。

・カーニバルの誕生―人形劇関係者の祭りとして―

カーニバル誕生のきっかけは、劇人から飯田市への、自分たちの祭りをこの地で開催したいという依頼であった。当時の日本の人形劇界は、職業専門劇団（劇団と略記）が一同に会する場を持てない組織力の希薄さ、また、劇団の多くをアマチュア劇団（アマ劇団と略記）が占める状況での芸術性向上への課題など、いくつもの問題を抱えていた。こうした実態に鑑み、これからの日本の人形劇の発展のためにも、劇団もアマ劇団も、年に１度参集し交流と研鑽を積む場の必要性が感じられたものと考えられる（松澤，1992：337）。

飯田市はこの依頼に対して、第三次全国総合開発計画[1]の施行する「人間居住の総合的環境の計画的な整備」の具体化として人形劇の祭りを地域の活性化に結び付け、「地域づくりのためのイベント」への活用を想起した。こうして、フェスタの前身カーニバルは、人形劇人と飯田市との双方の思惑が結合したところに誕生した。カーニバルは両者の協議により、「市民・劇人・行政が一体となってつくりあげる文化運動」（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1987：３）を基本的な考えとした。

・カーニバルの成長―市民の積極的参加、観るからつくるへ―

しかしながら、カーニバル10回までの「市民・劇人・行政の３本柱」の実態は、市民が３本柱の１本にはなり得ず、行政の指導の下で上演会場の運営業務にわずかに携わるのみで、観客としての参加が中心であった。

その後、市民の各種団体がカーニバル実行委員会に参加し、市民が積極的に「劇人のお祭りに協力する」方策が検討され始めた。飯田青年会議所は、市街の中央公園に設けられた「カーニバル・ステーション」でのステージ運営や物品販売を担当。また、有志による市民会議は、人形劇団の市街地パレードを盛り上げるコンテストへの協力などを行った。上演を観て楽しんでいた市民は、祭りをつくる参加への意欲を膨らませ、積極的にかかわるようになっていった。こうした動きは回を重ねるなかで多様化し、15回を過ぎると、青年会議所は期間中のボランティアの募集を行ったり、市民劇団のカーニバルへの上演参加をねらったワークショップの開催を行ったりするようになった。

市民は当初の「観客」としての参加から、「劇人に協力」する参加、そして、「自ら祭りをつくり出す」能動的な参加へとその関わりの形態を変容させていったのである。

・カーニバル終了とフェスタへの再生―市民の祭りに―

市民・劇人・行政のカーニバルをつくる３本の柱がそれぞれ活発に活動を展開していくようになったにもかかわらず、カーニバルは第20回をもって幕を閉じる。終了は何の前触れもなく、突然田中秀典前市長により宣言された（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会，2009：74－75）。この決定に至った理由は、カーニバルをまちづくりの文化イベントにしたいと考える行政と、カーニバルはあくまでも自分たちの祭りと考え、このイベントを核に人形劇芸術の発展を目指したいと考える劇人の間に以前からあった溝が、一気に深まったためと考えられている。終了の決定に際しては、市民は蚊帳の外であり、戸惑いのなか終了という結果を受け止めるしかなかった。

しかしながら、このまま人形劇の祭典が飯田から無くなっていいのか、現フェスタ実行委員長である高松和子氏の呼びかけによって市民有志が集まり、「新しい人形劇カーニバルを考える会」が結成された。参加者は、地元アマ劇団の有志、飯田青年会議所、南信州アルプスフォーラム、カーニバルにかかわっていた公民館関係者や実行委員会メンバーな

どであった。また、県外の劇団員も数名参加してもらい意見を聞いた。こうした参加者により度重なる話し合いが持たれ、そのなかで、カーニバルの成果や市民にとっての意義が検証された結果、新たな人形劇の祭典を市民の手によって生み出すことに参加者の意向が固まった。翌1999年、飯田市の人形劇の祭典は、フェスタとして再生され、1年の空白も無いまま開催された。

フェスタの基本的な考え方は、「市民と人形劇人がともにつくる祭典」である（いいだ人形劇フェスタ実行委員会，1999）。それまでの市民・劇人・行政の三位一体の運営体制ではなく、市民有志による実行委員会を組織し、市民や劇人誰もが自分の思ったこと、やりたいことが提案でき、その提案に対し皆の賛同を得られれば、皆でその提案が実行できるようにサポートする。行政はあくまで裏方であり、情報の提供や各運営を行うための実務を担当するというものとなった。「みる　えんじる　ささえる　わたしがつくるトライアングルステージ」（いいだ人形劇フェスタ実行委員会，1999）をこの祭典にかかわる一切の活動の中核におき、観る人・演じる人・祭典を支える全ての人が誰に強制されることなく主体的にかかわっていくことが、フェスタの理念として設定された。

②フェスタの組織

フェスタ実行委員会の組織図は、図1のようである。

組織は、フェスタ誕生当初から状況に合わせ運営に支障が出ないよう随時検証と変更が

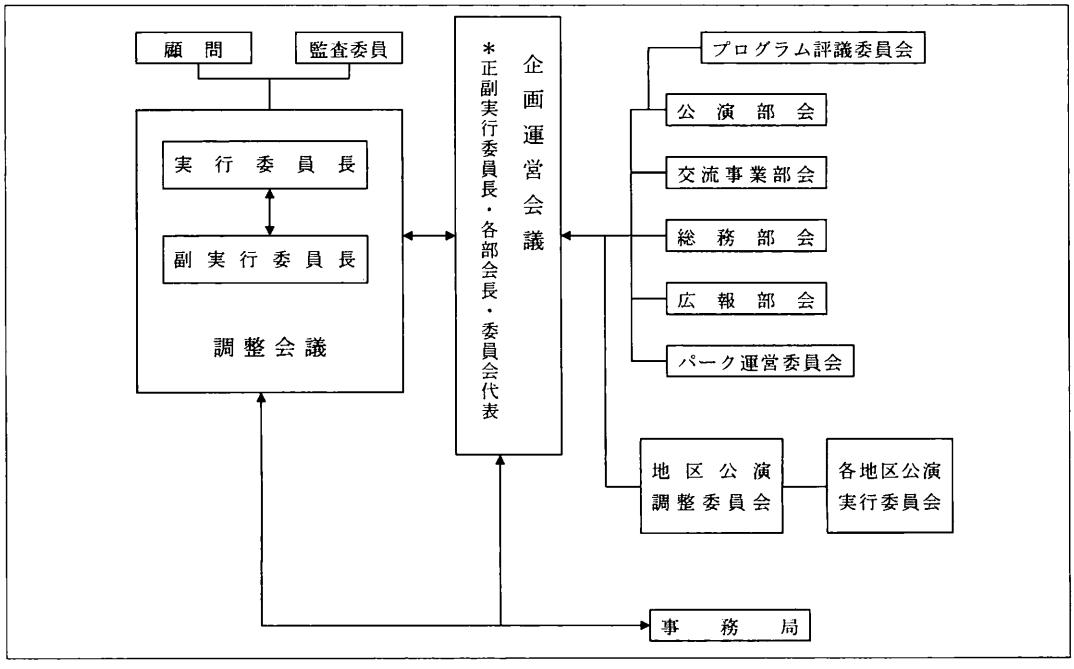

図1：いいだ人形劇フェスタ実行委員会組織図

（いいだ人形劇フェスタ実行委員規約より。現状にあわせ筆者が一部変更。）

加えられている。

現在は表のように、業務の内容によって4部会・3委員会が組織されている。ここに参加する実行委員スタッフはプランニングスタッフとして、事前の企画・期間中の運営・事後の反省と、年間を通してフェスタの業務に従事している。現在約60名がここに属している。

・公演部会：公演全般、ワークショップ、地区公演の指導など
・交流事業部会：市民・劇人の多彩な交流のための企画運営、式典などの催事
・広報部会：広報、宣伝、記録、ガイドブック等の作成、インフォメーションなど
・総務部会：ボランティアの募集・指導、グッズ販売など
・パーク運営委員会：セントラルパークの企画運営、模擬店など
・公演企画委員会：特集公演の企画、海外劇団作品の選考、有料公演作品の選考など
・プログラム評議委員会：期間中上演・催事を視察し、終了後の講評を次年度に反映させる資料の作成

これらにあわせて、開催期間中およびその前後のみのボランティアスタッフがいる。これは中高生の約300名と一般を含め約500名におよぶ。

また、カーニバルから引き継がれ、飯田市の人形劇の祭典の最大の特徴といえる市内全域での分散公演に携わる「地区実行委員会」がある。20地区に約80の地区公演会場が設けられるが、各会場に実行委員会が組織され、実行委員会ごとに企画運営を行っている。ここに携わる地区実行委員は、総勢約1,800名を越える。これらの地区実行委員は、フェスタが主体的な意思を持つ市民の参加によって成り立つ実行体制であるといいつつ、ほとんどが公民館の役員やPTAなど、地区の特定の役職を担った人たちが役職業務として引き受けている。2006年に実施した地区実行委員への調査（松崎他，2006：9－14）では、地区実行委員会参加の立場は、「公民館の委員として・公民館関係団体の代表として・PTA役員として・青少年健全育成会役員として・婦人会や自治会また職場の代表として」と、役員や団体の代表として参加が9割以上を占め、ほとんどが義務的な参加者であった。こうした地区実行委員は、当初、「地区の役員としての責任（56.9%）」と感じながら参加している。しかし、彼らに終了後の充実感を問うと、「充実感をとても感じた・まあまあ感じた」をあわせると73.8%と7割を越えていた。また、「フェスタへの関心」は当初の21.2%から終了後は34.8%へ、「地区の活性化への関心」は16.6%から25.6%へと増加がみられた。

地区実行委員は、本部のプランニングスタッフとは異なり、役員としての義務的な参加という実態があるものの、根底には地区への関心や愛着さらに責任があり、終了後には、人形劇や、地域の文化活動、さらに地域そのものへの関心を広げることができている。

2．飯田市の文化的土壌

カーニバルが飯田に誕生した背景の1つと

して、当時の市長松澤太郎氏は飯田で育まれてきた風土をあげ、この地が神事芸能、人形芝居、農村歌舞伎など多彩な民俗芸能が伝承されている特異な歴史的風土を持つ土地であること、そして、なかでも人形芝居は、かつて伊那谷全域にわたり20座を超えるほどあり、現在もなお今田人形・黒田人形（飯田市）、早稲田人形（阿南町）、古田人形（箕輪町）の4座が現存すると述べている（松澤, 1992：339）。また、佐藤は（佐藤, 1989：162－163）、たまたま飯田で始まったことが「飯田で（開催され＊筆者）なければならない」と自覚されるようになった要因として、市民自身が外部からの文化を主体的に受容し育てていくことのできる豊かな文化的土壌を持っていたと述べている。

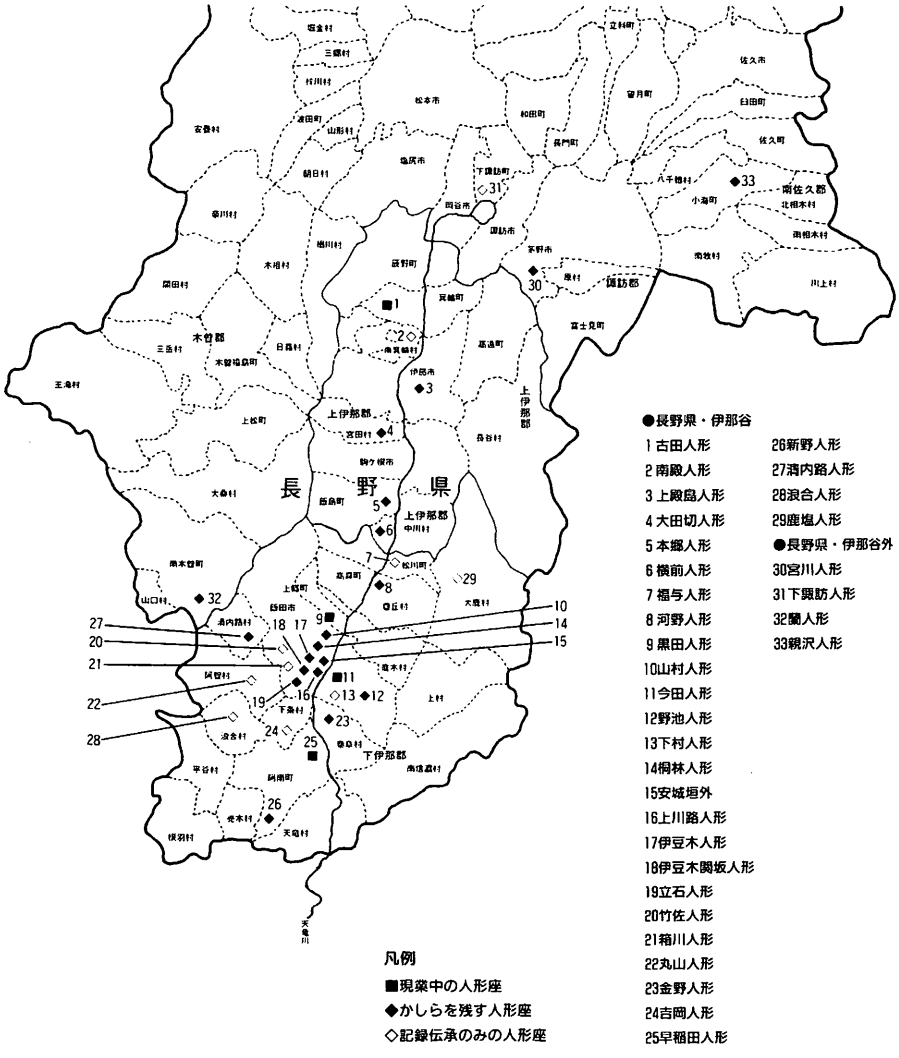

図２：人形座の分布（飯田市美術博物館「伊那谷の人形芝居」より）

実際、民俗文化財の宝庫といわれるほど豊富に存在している伊那谷の土着的民衆文化、中でも人形浄瑠璃などの民俗芸能の継承、また、戦後の先進的な社会教育活動や文化運動を通した市民の文化的能動性の成熟等は、現在フェスタを中心とした文化活動振興を考えるさい鍵になると思われる。

以下、飯田周辺を囲む下伊那の伝統芸能の継承から飯田の文化的背景をまとめる。

(1) 人形芝居（人形浄瑠璃）

飯田市立美術館の調査（1991，7）によると、かつて長野県には33の人形座があり、そのうちの29座が上伊那・下伊那両地域にまたがる伊那谷に存在していた。このうち、現在も継承されている人形座が4座ある。北から、上伊那郡箕輪町の古田人形、飯田市の黒田人形・今田人形、下伊那郡阿南町の早稲田人形である。これらはどれも300余年の歴史を持ち、伊那谷4座として、現在も地元の神社の奉納上演ほか、伊那人形芝居保存協議会主催の4座合同発表会、フェスタ、依頼による上演、また小中学校での指導など年間を通して活動を行っている。

伊那谷に人形芝居が伝わったのは天保4（1647）年のことで、下条村吉岡に名古屋の人形遣い幅下団兵衛が来訪し芝居を行った。その後、飯田市千代の人々が自らも演じてみたいと元禄元（1688）年頃人形を買い求めたが、その人形はあまり遣われぬまま、宝永元（1704）年に今田（飯田市龍江）の観音講の人々に買い取られた。同じ頃、黒田（飯田市上郷）では、正命庵の遊芸堪能な正岳真海が、近隣の若者を集めて三味線や人形を弄んだと伝えられている。また、伊豆木（飯田市）に陣屋を持つ旗本小笠原氏、上古田（上伊那郡箕輪町）の豪農唐沢氏らが相次いで人形を買い求め、人形芝居が伊那谷各地に始まっていった。当時は素人の物真似の域を脱しない程度のものであったようである。しかし、竹本義太夫や近松門左衛門が活躍し人形浄瑠璃が演劇としてのスタイルと内容を固めつつあったのが元禄や天保ころであることから考えると、大阪や江戸から遠く離れたこの地に人形芝居が伝播していたのは驚異である。

都で一斉を風靡していた人形浄瑠璃も、明和・安永（1764～80）頃になると、歌舞伎の興隆により観客を奪われた。そんななか、関西の人形遣い達が生きる場所をもとめ伊那谷に流れ込んだ。折しも、伊那谷では人形芝居が大人気で、人形遣いを歓待し、師匠とあがめ、その芸の習得に努めた。師匠を得た伊那谷の人形芝居は従来の真似の域を脱し、素人離れした本格的な芸能を楽しむまでに発展した。このように元禄より始まり順次各地に人形芝居ができていったが、最も多くなったのは幕末から明治初年にかけてであった。

ところが一転、明治の末にはそれらのほとんどが廃滅してしまう。その要因は、第1に、天保の改革令による「神事祭礼に芝居見物の見せ物禁止の触」である。飯田藩でも天保12（1840）年7月、郷村神社祭礼の芝居見物を禁じた。しかしながら前年に新しい舞台を建てた下黒田では、天保13年この舞台を使い子ど

も操ということにして実は若連が人形芝居を行い罰せられた。このような人々の情熱のあるところでは、どうにかお上の手をかいくぐり人形を続ける努力がなされたが、それほどの情熱がなく御触れに忠実に従った所では、人形芝居が途絶えてしまった。

第２の人形芝居の障壁は、明治維新後の諸識鑑札制度であった。上演に際しての申請書類の提出や臨検のわずらわしさ、また、安い値段ではない鑑札料を毎年払い続けることの負担から、上演が行いにくくなり芝居をやめてしまうところが増えた。その後、明治20年には素人芸人の鑑札はなくなり、素人芝居の流行によって男女問わず舞台に立つようになった。しかし、技術的困難さがある人形芝居よりも、上手下手は別として誰でも取り付ける歌舞伎（地芝居）は人気が増し、大正時代に活動写真に代わられるまで続いた。古田人形の記録によると、地芝居を演じたいという若者と人形芝居を守ろうとする年配者の間での対立が一時期あったことが記されている。

人形芝居は天保以来お上からのさまざまな抑圧にあい、そのたび人々の人形への情熱で乗り越えてきたが、最終的には、明治時代に入り地芝居に心を傾けた若者の意思に止めを刺された形でほとんどが終息してしまった。

(2)　歌舞伎（地芝居）

17世紀初め出雲阿国によって始まったとされる歌舞伎は、元禄時代にさしかかるころその形が整い、江戸に荒事の演技で名を売る市川団十郎、西に恋愛劇に巧みな坂東藤十郎という名役者が登場し、歌舞伎役者が地方巡演にも出るようになった。当時、農村経済は豊かになり、こうした一座を受け容れる体制が地方にできていたことも芸能が地方に広がる要因であった。伊那谷においても養蚕が盛んに行われるようになったため、前節の人形浄瑠璃（人形芝居）や歌舞伎のようなお金のかかる芸能でも、好きとなれば進んで学ぶ積極性を持つ人々が現れた。伊那谷へは、正徳・享保（1711～1735年）頃、飯田藩領の知久平村舟渡、山本村二ツ山、嶋田村柿木嶋などで芝居興行が催された。また、文化・文政（1804～1829年）には各地で既に地狂言が行わるようになり、天保年間（1830～1843年）には各地に舞台が建設されるようになった。そのような盛り上がりのなか、天保２（1831）年には５代目岩井半四郎、天保５（1834）年には３代目尾上菊五郎（音羽屋）一座、天保12（1841）年には７代目市川団十郎（成田屋）一座と、江戸歌舞伎の名優が次々に飯田に足を運び上演を行っている。

こうして、最初は買い芝居を観て楽しんでいた人々は、観て楽しければそれを自分たちのものにしよう、演じて楽しみたいという気持ちが生じ、それをもって神さまへの感謝の印、あるいは自分たちの生きる証として外に誇らしげに示そうとした。伊那谷に遺構の認められる舞台の数およそ150という数（三隅、1986a：183）からも、当時の隆盛と人々の芝居好きが想像できる。

こうして人形芝居と拮抗するように誕生し活発に行われるようになった歌舞伎（地芝居）

も、人形芝居同様、明治になり鑑札が出たことで廃絶していった。

そうしたなか、人形芝居や歌舞伎には手が届かないが、獅子舞なら道具も安く手軽にできて村の祭礼行事として禁止令にもかからないと、歌舞伎を捨て獅子舞を始める村の青年たちが現れだし、村の芸能は流行に流され再び次のものへと代わっていく。

(3) 獅子舞

飯田を含む下伊那地方は、上述のように、古来から芸能の盛んなところであるが、中でも、飯田市を中心とした平野部には獅子舞が数多く分布し、現在30を超える獅子舞が各町内を中心に行われている。(図3参照)

これらの獅子舞は、形態的にはいずれもいわゆる「二人立ちの獅子」に属するものである。すなわち、大降りの神楽獅子系統の獅子頭に胴幕（ホロなどとよぶ）を垂らし、その幕の中に2人ないしは2人以上の者が入って獅子を舞わす形のものである。飯田地方には、同じ二人立ちの獅子舞と言っても、それを多少変えて、胴幕の中に囃子方を入れて獅子が行動する「練り獅子」とか「屋台獅子」と呼ばれるものがあり、大神楽の舞を主として演じる二人立ちの獅子舞「大神楽獅子」と勢力を半ばして分布している。この屋台獅子は、全国にここ飯田地方にのみ存在すること、ま

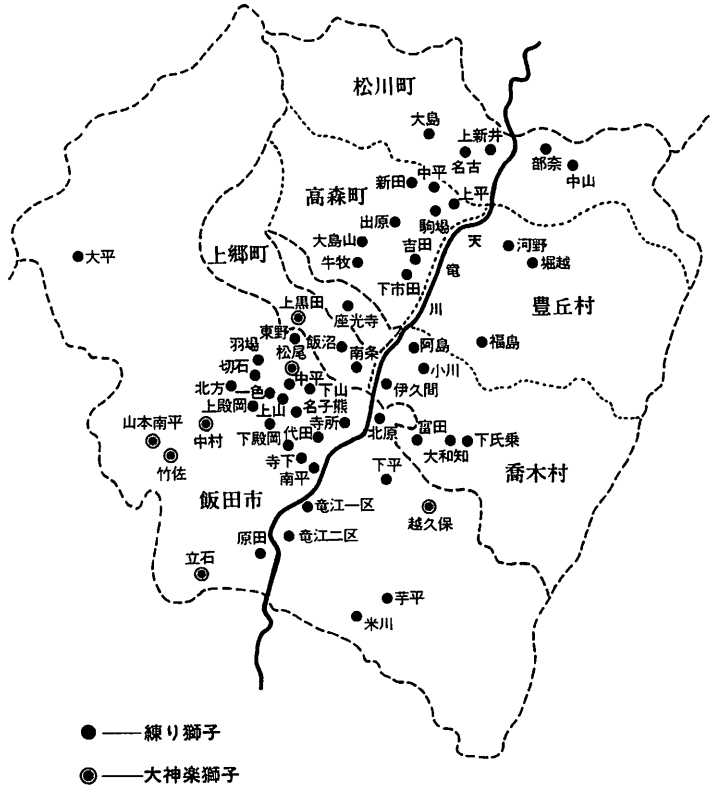

図3：獅子舞の分布（三隅治雄「芸能の谷　伊那谷2　芸能のパノラマ」より）

た、これだけの数の獅子舞がこの地域に集中してあることは、注目すべきである。

図４：屋台獅子：（三隅治雄「芸能の谷　伊那谷２　芸能パノラマ」より）

これらの獅子の源は、飯田市に隣接する高森町大島の瑠璃寺の獅子舞（図４参照）とされている。この獅子舞は、天永３（1112）年、寺建立の際、滋賀県坂本の日吉神社の獅子舞を伝承して催されたのが起源とされている。現在の獅子舞は、宇天王と獅子、そして警護の猿と赤鬼、青鬼である。獅子の行道は、まず宇天王が獅子の前に立って獅子を起こす、獅子が目を覚まし暴れだす、それを宇天王が鎮めるというものである。この形は、江戸末期頃固定化され現在に至っているようである。

この瑠璃寺の獅子舞が近隣の地区へ伝播したのは明治になってからである。この時期になって飯田の各地区に広く伝播されたのは、前述した人形芝居および歌舞伎が鑑札や経済的な問題から各地区で継承しにくくなったことが大きな要因であったといえる。

そして、その伝播において、既存の形をそのまま教えたり、教えられたそのままを受け入れたりはせず、必ずなにか一工夫して自分たちのオリジナリティを出したものにしているところに、飯田の人々の独自性と芸能への情熱が表れている。つまり、瑠璃寺から高森町牛牧への伝授においてわざわざ違うお囃子を考案して教えたり、また、人形芝居や歌舞伎が盛んな時代には、宇天王の代わりに浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」の松王・梅王・桜丸を練り獅子の引き手にして登場させるように変えたり、また、オカメやヒョットコが獅子の道中に先駆してこっけいな振りを見せるような付け加えをして自分たちの獅子舞を生み出している。

そうしてまた、「お練祭り」があったことが、獅子舞特に屋台獅子の伝播を広く勢いづけたことは間違いない。お練祭りは、飯田市街地北端の大宮諏訪神社で、寅年と申年に行われる式年例祭の際に開催される。これは、江戸時代飯田藩主脇坂守が同神社を深くあがめており、社殿再建（慶安４・1651年）にあわせて、獅子や田楽、歌舞音曲を取り入れた盛大な祭りを始めたのがきっかけである。江戸時代は屋台や山車、神輿、子どもの踊り、お囃子などが各地区から出されていたが、時代により出し物は変化してきた。平成22年３月26～28日の３日間にかけて行われたお練祭りには、計42団体が参加、そのうち獅子舞は27団体、このほか、大名行列、踊り、太鼓、長持、

またバトントワラーも含まれていた。

中でもひときわ注目されるのが、東野の大獅子と本町3丁目の大名行列である。大名行列は、火災による屋台焼失に伴い新たに大名行列の道具を購入し、明治5年より演技を披露するようになった。東野は、諏訪大宮神社の御膝元の地区としてこれに対抗し、何か目先の変わった世間をあっと言わせる出し物をと考え、大獅子を製作し登場させたのが始まりである。当初、張りぼてで作った5尺4寸の大獅子が大評判となり、その後大正9（1920）年の御大典を機会に本獅子を名古屋の業者に依頼して製作し現在に至っている。東野と同様、飯田周辺の各地区は、自分の地区が一番目立ちかっこいい出し物となるよう切磋琢磨し、その雰囲気のなかで獅子舞は大型化し、屋台獅子が飯田の地域一円に広がっていった。こうして獅子舞は、大正ごろ最も隆盛を博し、その後は衰退していった。昭和40年代後半（1970～75年）には休止が相次ぐほどとなった。

しかしながら、平成にはいり、再び各地区で活発な取組みが展開されるようになる。なかには、新たに獅子舞を作り地区で取り組み始めた地区もみられるようになった。

飯田市鼎地区では、休止していた1地区の獅子舞が昭和63（1988）年に復活、平成6（1994）年には獅子舞の無かった地区に獅子舞が新設され、現在10地区中7地区に獅子舞がある。平成19（2007）年には、いいだ人形劇フェスティバルと友好提携を結ぶ台湾の雲林県の人形劇フェスティバルに鼎中平の獅子舞が招待され参加した。これを機に、平成20（2008）年より同地区で南信州獅子舞フェスティバルが開催されるようになり、3回目を数える平成22（2010）年には、第13回全国獅子舞サミットが飯田市市街地で大々的に開催された。現在、飯田は、獅子舞の隆盛再来の相を見せている。

3．フェスタ成立の文化的要因

伝統芸能の宝庫といわれる伊那谷・飯田の伝統芸能を代表する人形芝居（人形浄瑠璃）、歌舞伎（地芝居）、獅子舞をとりあげ、その歴史的変遷をみてきた。その結果、江戸時代中期以降に誕生したこれらの3つの芸能は、隆盛から衰退への波と誕生から隆盛への波を重ね、世代交代を繰り返すようにして、人形芝居―歌舞伎―獅子舞、そして現在のフェスタに至るまで、1つの流れとしてつながってきていることがわかった。その流れは、飯田の人々の、新しく面白いものへの志向と、観ること以上に自分たち自身が演じて楽しむことへの志向に強く影響されるなかでの変遷であった。

三隅は、民俗芸能は実は早くて30年、遅くて4・50年を1周期として盛衰を繰り返すと考えられ、その点からみて、昭和30年代以降、獅子舞が衰退した後に、飯田に新たな芸能が育っていないことに対し不安感を感じると述べている。（三隅，1986a：103）

三隅が危惧した昭和後半以降に飯田に新たに育った伝統が、人形劇の祭典であった。人形劇関係者のお祭りであったカーニバルが20年をもって解散した後、すぐさま市民が、

今度は自分たちがつくる人形劇のお祭りを生み出そうと立ち上がり、フェスタが誕生した。この経緯はまさに、江戸時代の人形芝居や歌舞伎の享受に相通じるものがあると考えられる。また、人形劇関係者が飯田に来て生み出した祭典カーニバルを、原形は保ちながら自分たち市民の人形劇のお祭りフェスタにしてしまう点は、瑠璃寺の獅子舞が各地に伝播される中で各地区が一工夫を凝らし、あらたな特色をもつ自分たちの地区の獅子舞を創造したのに通じていて妙である。

また、人形芝居も歌舞伎もそして獅子舞も、飯田のほぼ全域の各地区に分布していたことから考えると、それぞれの地区がお互いに意識しあい、他の地区で面白いことをやっていれば自分たちの地区でも取組み、他地区よりより良いものをつくりだそうとする、文化・芸能に対する意欲と切磋琢磨する対抗意識があったことがうかがえる。この地区のまとまりと地区ごとの対抗意識があったことが、新たな芸能への積極的な取り組みや、芸能のレベル向上、そして継承を続けさせたと考えられる。

平成時代に入り鼎地区を中心に再び盛り上がりを見せる獅子舞は、飯田旧市街地に本部を置く人形劇の祭典フェスタからの刺激を受けていることは十分考えられる。また、同じ鼎地区において、獅子舞が無かった地区があらたに獅子舞をつくり取組み始めた動きは、まさに大正時代、獅子舞全盛当時の、飯田地域全体への伝播と同じである。

また、フェスタの地区公演の運営においても、市内20地区それぞれが各地区の上演を楽しいものにする工夫を各地区が行うことで、お互いが刺激しあい、全域的な広がりを持つフェスタが１つの大きなお祭りとして盛り上がっていると思われる。

以上の点から、市民文化活動であるフェスタが、この地に30年以上継続して開催され、伝統の域に至るようになった文化的要因を整理すると、以下のようになる。

・飯田の人々は芸能への関心が高く、観て楽しむから演じて楽しむことに積極的に取り組み、新たな芸能を根付かせていく気風がある。
・飯田の人々は、単なる真似ではなく、一工夫するオリジナリティを発揮した文化創造に長けている。
・地区のまとまりがあり、かつ、地区同士の対抗意識があることで、地区ごとで取り組まれる芸能・文化活動が積極的に展開される。

おわりに

本稿では、民俗学の宝庫といわれる飯田・下伊那地域の伝統芸能の変遷をたどることでこの地の文化的土壌を探り、フェスタという市民による文化活動成立の文化的要因を探った。そこからは、飯田の人々の芸能への積極的な取り組みへの気風や地区のまとまりの強さが明らかになった。

今後は、そういった人達が具体的にどのように地区内で組織を組み、それぞれの芸能活動を展開していったのか、地域内の組織と機能に焦点をあて、その構造を時代に沿って考

証し、当時の地域コミュニティ形成における伝統芸能の役割について検証したいと考える。

〔注〕

1）1977（昭和52）年11月策定された第３次全国総合開発計画は、その基本目標として、「限られた国土資源を前提として、地域の特性を生かしつつ、歴史的、伝統的文化に根ざした、人間と自然との調和のとれた安定感のある、健康で文化的な人間居住の総合的環境を計画的に整備すること」を掲げ、「大都市への人口と産業の集中を抑制し、一方、地方を振興し、過疎過密問題に対処しながら、全国土の利用の均衡を図りつつ、人間居住の総合的環境の形成を図る」ことを定住構想と名づけた。

〔参考文献〕

浅井舎人，1991，「伊那谷の人形芝居―芸能をささえた人びと―」，『伊那』１月号，14－25頁，伊那史学会

いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会，2009，『つながってく。～人形たちと歩んだ30年～いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌』，いいだ人形劇フェスタ実行委員会

伊藤義夫，2004，『操り始めて300年今郷土に生きる　今田人形』今田人形発生300年周年記念事業実行委員会・今田人形座

大沢和夫，1985，「伊那街道「出る荷」「入る荷」」『信濃路』第50号，44－48頁，信濃路出版

日下部新一，1974，「伊那谷の人形(1)」『伊那』９月号，３－８頁，伊那史学会

日下部新一，1974，「伊那谷の人形(2)」『伊那』10月号，３－８頁，伊那史学会

日下部新一，1974，「伊那谷の人形(3)」『伊那』11月号，14－19頁，伊那史学会

日下部新一，1974，「伊那谷の人形(4)」『伊那』12月号，14－22頁，伊那史学会

日下部新一，1975，「伊那谷の人形(5)」『伊那』２月号，14－18頁，伊那史学会

日下部新一，1981，「黒田諏訪神社と人形芝居」『伊那』３月号，８－11頁，伊那史学会

日下部新一，1985，「伊那の芸能」『信濃路』第50号，120－123頁，信濃路出版

桜井伴，1985，「伊那街道　中馬が運んだ文化」『信濃路』第50号，39－43頁，信濃路出版

佐藤一子，1989，『文化共同の時代（文化的享受の復権）』青木書房

下伊那教育会，2006，『下伊那史　第８巻』下伊那誌編纂会

中村寿人，1981，「大鹿歌舞伎」『伊那』３月号，30－33頁，伊那史学会

松崎行代・飯田市公民館，2007，『いいだ人形劇フェスタに見る市民文化活動の成果と課題　報告書』飯田市公民館

松澤太郎，1992，「人形劇のまち　飯田」『21世紀の地方自治戦略６　地域の活力と魅力』，332－356頁，ぎょうせい

三隅治雄，1986ａ，『芸能の谷（伊那谷）第２巻　芸能のパノラマ』新葉社

――――，1986ｂ，『芸能の谷（伊那谷）第４巻　山国の文化再興』新葉社

宮本辰雄・三隅治雄・日下部新一，1986，『信州の人形芝居』，信濃毎日新聞社

麦島正吉，2001，『麦島正吉と仲間による黒田人形覚書』伊那谷の人形芝居研究所

村沢武夫，1967，『伊那文庫４　伊那の芸能』伊那史学会

〔参考資料〕

飯田市美術館，1991，「伊那谷の人形芝居」飯田市美術館

いいだ人形劇フェスタ実行委員会，1999，いいだ人形劇フェスタリーフレット

人形劇カーニバル飯田実行委員会，1998，人形劇カーニバル飯田 '87開催要項